

わたしと 新聞

interview

『 敦賀海陸運輸

代表取締役社長

有馬 茂人氏 』

スクラップ帳は 未来を切り拓く羅針盤

日本海側で2番目に貨物取扱量が多い敦賀港で、港湾運送事業などを展開している敦賀海陸運輸。社長の有馬茂人さんは、毎朝、福井新聞と経済紙に目を通すことを日課としています。特に社会・経済面、地元の話題、そしておくやみ欄は欠かさずチェック。「ニュースはネットでも見られる時代ですが、紙媒体だと多角的な視点から物事を俯瞰できます」と分析します。「地元紙の魅力は、幅広い地域の問題を読める点ですね。仕事で交流のある方の取り組みが紹介されることも多いので、『新聞に載っていましたね』と連絡することで、コミュニケーションにも繋がっています」



新聞を単なる情報源としてだけでなく、24年間にわたり活用しているのが、自ら「予記帳」と呼ぶ手作りのノートです。仕事に関連する記事を切り抜き、貼り付け続けたノートは現在48冊目。その日にやるべきこと、社内外の会議や商談のメモ、取引先の動向など、大切な情報がぎっしりと詰まっています。

この習慣を始めたきっかけは、2001年11月14日付の福井新聞の記事でした。戦後復興に尽力した元福井市長・故熊谷太三郎氏が、「予記帳」を用いて執務にあたっていたという内容に心を動かされたから。当時37歳で、東京での商社勤めを経て地元に戻り、家業を継いだばかりだった有馬さんは、すぐにノートの実践を始めました。当初は必

要事項をメモするだけでしたが、次第に敦賀港の整備計画や業界の動向など、業務に関わる記事や資料も加わるようになりました。「ハサミで切り、のりで貼るという手作業で情報を整理することで、内容が深く記憶に刻み込まれるんです。ノートのどこに何を貼ったかまで覚えているんですよ」。過去の情報を確認する際は、関連する記事を頼りにノートをめくり、当時のメモを見返すこともよくあるといいます。

新聞から社会の動きを常にチェックし、「ビジネスチャンスはないか?」「どうお手伝いできるか」と目を光らせる有馬さん。切り抜いた記事は社内で共有し、港の利用状況を予想したり、必要な対策を検討したりと戦略的な活用も行ってい

スクラップ帳は「相棒」 敦賀海陸運輸・有馬茂人社長



記事を切り抜き貼り付けた「予記帳」。情報には社内会議などで共有する。敦賀市の敦賀海陸運輸

敦賀海陸運輸は、ある程度「予記帳」によって、日々の業務を把握し、必要な情報を手早く取り出すことが可能。また、新聞の「おくやみ」欄は、社員のモチベーションを高めるのに役立つ。有馬さんは、新聞の「おくやみ」欄は、社員のモチベーションを高めるのに役立つ。有馬さんは、新聞の「おくやみ」欄は、社員のモチベーションを高めるのに役立つ。

左/A4サイズの分厚い予記帳を手に持つ有馬さん。後ろの本棚には書き留めてきた日々の記録がズラリ 上/2019年6月18日付の福井新聞で「スクラップ帳は相棒」という見出しで取り上げられたことも（福井新聞社提供）

ます。近年は、国内の水素やアンモニアといった次世代エネルギーの活用に関する記事に注目しています。また、社員の働きがいや人事といったヒューマンリソースにも高い関心があります。

多忙な日々の中でも、毎日夕方にはノートと向き合い、その日の出来事を振り返り、翌日の計画を立てることを欠かしません。ノートは業務と気持ちを整理する上でも大きく役立っているそう。「何か問題や課題が発生しても、書き出してまともにと頭の中もクリアになります。私にとって、なくてはならない存在ですね」とほほ笑みます。「敦賀港を日本海側最大の海の玄関口にしたい」という思いを胸に、仕事の相棒である予記帳とともにこれからも港の未来を描いていきます。